九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

一九三〇年代の北京における日中学術交流研究

稲森, 雅子

https://hdl.handle.net/2324/4059959

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式６－２）

氏　　名	稲森　雅子
論　文　名	一九三〇年代の北京における日中学術交流研究
論文調査委員	主　査　九州大学　教授　静永　健 副　査　九州大学　講師　井口　千雪 副　査　九州大学　准教授　藤井　倫明 副　査　九州大学　講師　国分　航士

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

一九三〇年前後のいわゆる「日中戦争前夜」とされる数年間に展開された日本と中国との学術交流の実態は、これまで無意識的に、あるいは歴史的事実から目を逸らそうとする意識的な忌避によって、日本の一般社会はもとより学界においても見過ごされてきた感がある。しかし本論文は、近年偶然に発見された当時の資料等をもとに、この時期の北京において繰り広げられていた日本と中国の中国学研究者たち（中国文学、中国語学、および日本古典文学を専門とする研究者も含む）の具体的な学術交流のありようを丹念に検証し、それらの意義を考察したものである。

本論文は、序章と結論をあわせ全体で８つの章によって論述がすすめられている。

前半部において中核をなすのは、中国の古典戯曲および古典小説の分野の学術交流である。当時北京大学でこの分野の研究を推進した馬廉と、東京帝国大学支那文学科教授塩谷温との交流は、やがて次の世代の倉石武四郎、長澤規矩也らを育てた。例えば北京留学中の倉石が馬廉や王孝慈らの所蔵する貴重な明清刊の挿図本によって制作した写真集（当時の呼称は不明。のち九州大学に所蔵される書名では『支那小説戯曲版画集』）は、その後、鄭振鐸『挿図本中国文学史』の第四冊（明清時代の巻）に挿入され、一方、長澤が東京駅に迎えた孫楷第（馬廉の後輩）は、長澤を含む多くの日本人有識者の助力を得て、古典小説の書誌研究の画期的労作『日本東京所見中国小説書目提要』等三部の文献目録を世に問うた。これらの事実は、従来、その一部分が断片的に語り伝えられてはいたものの、本論文によって、初めて具体的資料に基づいての検証が行われたものである。

後半部において中核をなすのは、中国古典詩歌、および日本文学の分野である。九州帝国大学において支那文学講座の初代専任教官として着任した目加田誠は、一九三三年から約一年半、北京に派遣されたが、そこでの最終的な寄宿先となったのが、北京大学日本語科主任教授の銭稲孫の自宅であった。本論文では、新発見の目加田誠の日記のほか、志賀直哉、里見弴など訪中した作家たちの日記や紀行文などからも、この銭稲孫の人柄や思想を考察し、従来の研究に加えて、幾つかの新たな事実を発見している。中でも銭稲孫が自宅の一室に有志からの醵金や寄贈書を募って私設の日本語図書室「泉寿東文書庫」を構え、機関誌「字紙簍」を発行していたことについては、その設立趣意書や「字紙簍」既刊分の実物を発見し、考察を加えている。この銭稲孫による私設図書室は、一九三四年の目加田誠寄寓時には満州事変後の騒擾によって既に閉館のやむなきに至っていたが、戦後、両者が発表する目加田誠『詩経』口語訳と銭稲孫『漢訳万葉集』の関係など、その親密なつながりについては、本論文の研究成果をもとに更に具体的な解明が今後も期待される。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な

能力を持つものと認めるものである。